

■いわて自然ノート

岩手県産鳥類目録の変遷

学芸第三課長 藤井 忠志

はじめに

岩手県立博物館に鳥獣専門の学芸員として着任して、はや10年目を迎えています。

学芸員の仕事のひとつとして、県民からの問い合わせに対し、疑問を解決できるようにわかりやすく受け答えする重要な業務があります。私が着任した頃は、昆虫専門の学芸員が不在のため、植物以外は何でも担当せざるを得ない環境でした。専門外のことをやるのはストレスでしたが、とてもいい勉強にもなりました。

そのような中で、「この鳥は珍しいか？いつどこで誰によって確認されたのか？」というマスコミからの問い合わせが最も多く、その都度いちいち調べては、受け答えをしていました。つまり珍鳥についての問い合わせ頻度が高く、多くの仕事を抱えているときには、このようなことをしては間に合わない上に大変、効率が悪いことなどから、何かいい対策法がないかを考えていました。問い合わせ対策マニュアルでも作成しようかと一時、着手しましたが、ねらいが絞りきれず途中で断念しました。しかし、この対策の一環として考えついたのが、岩手県産鳥類目録および岩手県産珍鳥詳細記録を自身の手で編むことでした。既存の目録もありますが、これでは情報が不足していたからです。

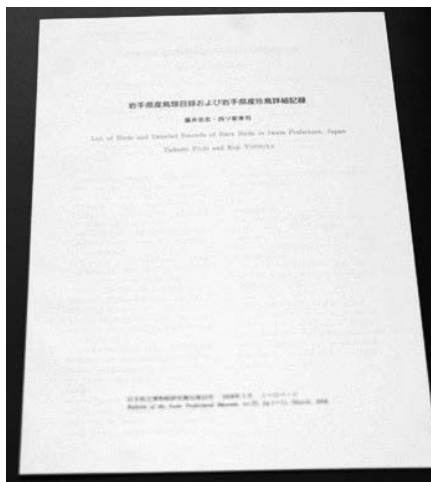
岩手県産鳥類目録の完成

岩手県産鳥類目録に着手したのは、テーマ展「岩手の鳥っこ」が開催された2006年のことで、完成したのが2008年でしたから、約3年の歳月を費やしました。すべてを網羅するには、珍しい鳥に関する情報を収集する必要性に迫られ、珍鳥詳細情報も編むことにしたのです。

日本野鳥の会盛岡支部や宮古支部、そ

の他、バードウォッチャーから情報を収集し、エクセルに入力する作業は根気と努力が必要でした。こうして完成したのが、当館の研究報告第25号に掲載された「岩手県産鳥類目録および岩手県産珍鳥詳細記録（藤井・四ツ家2008）」です。今、マスコミからの問い合わせには、必ずこの目録を携行して受け答えをしています。

また、情報提供者や関係者には配布しましたが、毎年、出現する岩手県初記録の渡来記録が加えられ、今や改訂に迫られているのが実情です。



岩手県産鳥類目録および岩手県産珍鳥詳細記録
(藤井・四ツ家 2008)

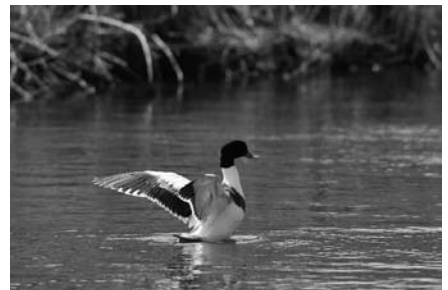
岩手県初記録鳥類の増加

上記の目録には344種類の岩手県産鳥類を掲載していますが、その後、毎年のように岩手県初記録が追加され、現在では351種類まで増加しました。初記録を列挙すると、ソデグロツル(近絶滅危惧種)、クビワキンクロ、オオハシシギ、カササギ、サバンナシトド(日本鳥類目録未掲載種)、ツクシガモ(絶滅危惧種ⅠB類)、アカアシショウゲンボウ、ハクガン(情報不足)などです。

近年、なぜこのように増えるのか？を自分なりに分析していますが、考えられ



雫石町に渡来したソデグロツル (2005)



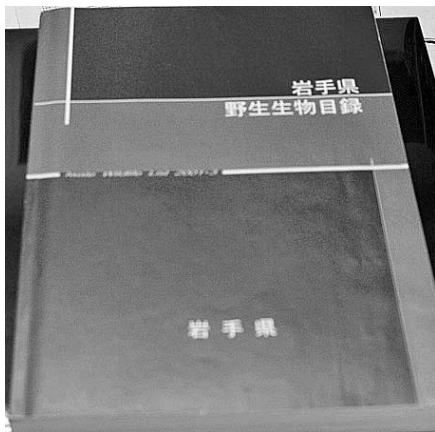
野田漁港に渡来したツクシガモ
(2009.March 四ツ家孝司氏撮影)

る要因のひとつに、デジタルカメラの進歩と普及があげられます。アナログ時代とは違い、望遠レンズとカメラの性能の向上には眼を見張るものがあります。アナログ時代には、理論と技術、そして根気が要求されましたが、今やそのようなものは不要となり、カメラさえよければ、誰でもどこでも撮影できるからです。特に団塊の世代が退職後、余暇を鳥見と撮影に費やす方が増え、「これ、なあに？」とHP等に公開しているのです。そのため、同定不可能と思われる鳥でも、すぐに同定されてしまうのです。他の要因としては、皆が異口同音に述べるように地球温暖化によるのでは？と思われるものが考えられます。これまで、九州地方でしか観察されなかったツクシガモやカササギなどは、その好例です。

過去の鳥類目録

これまでの鳥類目録やそれに近い書籍

を時系列に列挙すると、以下のようになります。山本弘先生の北上山地東側の鳥況（一関修紅短大紀要 1970）、葛精一博士が監修された岩手の鳥獣（岩手県環境保健部自然保護課1978）、遠藤公男氏が中心となり編集された岩手の鳥獣百科（岩手日報 1987）、由井正敏元岩手県立大学教授がチーフとなった岩手県野生生物目録鳥類編（岩手県2001）、そして藤井・四ツ家の岩手県産鳥類目録（岩手県立博物館 2008）など、5編があります。



岩手県野生動物目録（岩手県 2001）

山本先生は北上山地東側だけで294種をあげ、先駆的役割を果たしたと同時に、野鳥があまり注目されない時代のものでありながら、この目録は緻密な内容で貴重な記録といえます。葛博士は276種をあげ、岩手県内の鳥相の概観を提示しました。遠藤氏は県内に在住する熱心なアマチュアカメラマンたちを総動員し、223種をカラー写真の解説付きで図鑑にしました。由井元教授はいわてレッドデータブックを編纂するに際し、これまでのすべての情報を網羅し、341種をあげています。

山本弘先生の略歴

これらの中で山本先生は、宮古高等学校教諭時代に、これまで岩手県内の生

息が知られていなかったチョウセンアカシジミの存在を、初めて発表することに関与した昆虫の専門家でありながら、植物や鳥類をはじめとしホニュウ類・ハチュウ類・魚類・両生類・菌類、そして古生物を中心とした地質学など、自然に関わるあらゆる事象に眼を向けた博物学者ともいえます。

先生の経歴をたどると、横浜国立大学の前身である横浜高等工軍学校応用化学科卒業後、松尾鉱山に技師として就職し、鉱毒を北上川に放出することに反対し、退職。その後、下閉伊郡山田町船越の漣磯七兵衛氏（通称・ワシ捕り七兵衛）のところに身を寄せ、オジロワシやオオワシといった大型鳥類の生態研究をしていたようです。その生態研究中、宮古市内の銃砲店で散弾銃用の弾を購入の際、常安寺和尚の阿部文龍氏と知遇を得て、氏を介し宮古高校へ教諭として転職。生物・化学を中心とする理系の授業を担当されていたそうです。当時、先生から学んだ教え子のお話では、身につけるものはすべて舶来品で高級品といったハイカラーな方で、宮古高校自然科学部の顧問をされていた関係上、自ら昆虫採集をしたほか、生徒が収集してくるものを何でも同定する作業に没頭していたそうです。先生の採集された昆虫の一部と未整理標本等は、当館生物部門が管理する第二収蔵庫内に、山本弘コレクションとして大



収蔵庫棚の山本コレクション

切に保管されています。

山本先生の鳥類に関する論文

先生が書かれた論文で日本鳥学会誌に掲載された短報をみますと、投稿論文が以下のように9編もあります。1961年「岩手県における白鳥渡来記録」、1962年「顕著な地上目標（煙突）に飛来するイワツバメについて」、1963年「ヒメハジロ雄の渡来」、1967年「コノハズクの岩手県越冬例」、同年「コノハズク・オオコノハズクの生態と擬態について」、同年「ヒメハジロ雄の二年連続渡来」、1968年「鳥類の白化例」、1971年「地震に関係するキジの鳴きについて」、同年「ウソの室内繁殖とその長寿の例」。そして山階鳥類研究報告の「生態写真による大型カモメ4種幼鳥の識別」では、大御所・黒田長久博士から「海外の研究者に勝るとも劣らない識別法」との評価をいただき、日本鳥学会奨学賞を受賞しています。

先生の持論は、あらゆる生物相の分布は、地史との関連抜きでは語ることができず、特に鳥類の渡りには古い地史の影響が濃く、地史を紐解くと、その時代に生きていた生物相がある程度、推測可能であるといった論のようです。北上山地といった地質学上、最も興味深い地において、生物相にまでそのベースともいえる地質学を応用しようとした先生の姿勢には、一生態学にとどまらず地球史レベルでの視野の広さを感じます。

先生の残された研究に関する文献は、現在、宮古市立図書館市史編纂室にあるほか、遺品等は宮古高校時代に鳥類指導をいただいた最後の教え子である田鎖巖氏（日本野鳥の会宮古支部）が保管しています。

私は今後、これら貴重な研究資料や遺品の詳細調査を行う予定です。